

父が主の名によってお遣わしになる聖霊

ヨハネ福音書14:21-26

【新改訳 2017】

14:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。わたしを愛している人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身をその人に現します。

14:22 イスカリオテでないほうのユダがイエスに言った。「主よ。私たちにはご自分を現そうとなさるのに、世にはそうなさらないのは、どうしてですか。」

14:23 イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。

14:24 わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた父のものです。

14:25 これらのことを、わたしはあなたがたと一緒にいる間に話しました。

14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

【祈りながら考えよう】

- (1) 21節で、主が弟子たちに語られた真意は何ですか。
- (2) 「主を愛する人は、主の戒めを守る」その結果、その人にはどんなことが起こりますか。
- (3) 「助け主」として私たちに遣わされた聖霊は、どのような助けを与えてくださいますか。

【解説】

(1) 主が弟子たちに語られたことの意味

主は弟子たちにこう語られた。

「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。わたしを愛している人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身をその人に現します。」(21節)

このように主が語られると、イスカリオテでないほうのユダが主にこう尋ねた。

「主よ。私たちにはご自分を現そうとなさるのに、世にはそうなさらないのは、どうしてですか。」

ユダがこのような質問をしているのは、主が、「わたし自身をその人に現します」と言われたことに関連してのことである。

主の弟子ユダの質問は、主が語られたことの意味を全く理解していないところから起こっていることである。主が教えておられることの意味とは全く関係なく、枝葉の質問にすぎない。

このような問答は、「主とユダとの関心事の違い」をよく表している。主が語っておられることの意味は、

「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。わたしを愛している人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し」ますということである。

「わたし自身をその人に現します」と最後に言われたことは、主との親しい交わりが与えられるということ、主の戒めを守る者に対する「主の祝福の約束」である。

主の関心事は、あくまでも弟子たちが主の戒めを守ることであり、そうする時、主を愛していることになり、その人は主からも特別に愛され、祝福を受けるということであるから、この主の言われたことの意味が分かれば、自分は本当に主の戒めを守り、そのことによって主を愛し、また主からも愛されているのだろうかと自己反省をしている言葉が続かなければならないはずである。

(2) 弟子ユダの関心事のズレ

イスカリオテでないほうのユダは、

「私たちにはご自分を現そうとなさるのに、世にはそうなさらないのは、どうしてですか」と言っている。

主が弟子たちに姿は現しても、世にはどうして見せないのか、彼には理解できなかった。

弟子ユダがこのような質問をした背景には、当時の「一般的なメシア観」があったようである。当時、一般に

は、メシアであれば「世の人々すべてに分かる形でご自身を現される」「征服者である王、または衆望ある英雄として来臨される」と考えられていた。

主が弟子たちに対して、霊的な方法でご自身を「現そう」としておられることを理解できなかった。弟子たちは信仰により、神のみことばを通して、主を見るのであった。

ここに主の関心事と弟子ユダの関心事のズレがある。なぜこのようなズレが出て来たのかと言うと、日ごろの両者の関心事の相違がこうさせている。

しかし私たちも、御言葉がどう教えているかということよりも、今のキリスト教界の人々が教えていることが、とかく基準になりやすい。そして、そういった先入観を持って聖書や主イエス・キリストを見ようとする。

このような考え方は、うっかりするとパリサイ主義とあまり変わらないもので、主が、「あなたがたは、自分たちの言い伝えを保つために、見事に神の戒めをないがしろにしています」(マルコ7:9)と厳しく戒められたものになってしまう。

(3) 繰り返し語られた主の真意

そこで主は、ご自身が語られたこの真意を繰り返して言われた。

「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた父のものです。」

ここでは、主は「わたしの戒め」を「わたしのことば」と言い替えておられる。これは同じことと考えて差し支えない。「わたしのことば」とか、「わたしの戒め」とは何か。それは、主が13章34節で教えられた「互いに愛し合いなさい」ということである。

主を愛するということは、具体的には、兄弟姉妹を互いに愛し合うことである。このことは、ヨハネが繰り返し主のことばとして記していることであり、その手紙の中でも、次のように教えている通りである。

「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。神を愛する者は兄弟も愛すべきです。私たちはこの命令を神から受けています。」(1ヨハネ4:20-21)

主は、さらにここで、互いに私たちが愛し合うという主の戒めを守る時、父なる神と主イエス・キリストが

「その人のところに来て、その人とともに住みます」と約束して下さった。

14章1-3節では、主が私たちが天の住まいに連れて行ってくださいと約束して下さったが、今度は私たちが生きている今この所において、「主が来て住んでくださるという約束」である。

(4) 聖霊が助けてくださる約束

これらのことを、わたしはあなたがたと一緒にいる間に話しました。(25節)

「一緒」におられた間、主はある程度まで弟子たちを教えられたが、それ以上の真理を明らかにすることはできなかった。仮にそうしても、彼らにはそれを理解することができなかったからである。

主が教えておられるのに、それが分からないほど霊的に鈍い私たちに、主は助け主としての聖霊を送って、助けてくださると約束して下さった。

「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」

私たちは、聖書の中に、はっきりと主が語っておられるのに、それが何を意味しているのか、なかなか分からない者たちである。聖霊の神の助けが必要なのである。

五旬節の日に、聖霊は主イエスの「名」によって「父なる神」から遣わされた。イエスの「名」によって聖霊が来られたというのは、「地上における主イエスの権利を代行するために」来られたという意味である。

「聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え」る、と主は言われた。主の約束は弟子たちの弱い記憶力にとって、特別な慰めである。主はこう約束しておられる。聖霊は、弟子たちが主から聞いたのに忘れてしまった多くの教えを、教理的なものも実践的なものも、すべて思い出させてくださるであろう、と。

これはとても必要な約束であった。聖霊の助けによって、弟子たちは主が語ったことばを思い起こし、素晴らしい「新約聖書を完成する」ことができたのである。

今日は、私たちの手にある「神のことば・聖書」を通して、聖霊は、「主イエスが完成された救いのみわざ」を理解するように、みことばを教え、悟らせ、信仰を得させ、救いを経験できるように導いておられる。

聖霊の神が教えてくださる「すべてのこと」とは、私たちの霊的生活において必要な「すべてのこと」である。それは、すべて聖書の中に啓示されている。私たちの信仰生活に必要なことは全部含まれている。

また、主が私たちに命じられたみことば「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」(ヨハネ13:34)を実行できるように、従順の力を与えて助けてくださる。何と感謝なことであろう。